

【論文要約】

箱庭療法は、1929年にLowenfeld, M.によって考案されたThe World Technique（世界技法）を基にして、Kalff, D. M.がJungの分析心理学の理論を適用し、確立した心理療法である。制作者は砂を敷き詰められた砂箱に向かい、アイテムや砂を用いて砂箱の中に自由に制作する。日本には1965年に河合隼雄によって導入され、心理臨床領域のみならず福祉・教育などの様々な領域で用いられている。分析心理学では、箱庭を制作すること自体が治癒の体験に繋がると言われているが、制作者は箱庭を制作することによって、どのような体験をし、それがどのように治癒の体験に繋がらうのであろうか。本論文では、この問題意識に従い制作者の主観的体験と箱庭療法の治癒的要因の関係を検討していく。箱庭制作は力動性をもつ動的なものであることが先行研究から言われており、箱庭と制作者の間に、また制作者と見守り手の間にそれぞれ様々な力動が働いていることが考えられる。さらに、実際の箱庭療法では箱庭は複数回制作されることが多く、その力動は制作されるごとにプロセスを形成しながら、変化していくことが考えられ、その連続性の中での変化は箱庭療法の展開に大きく影響を与えるものであろう。本論文では、制作者の主観的体験の中での力動と、その力動に時間的な過程を付加した「プロセス」と「連続性」の3点に着目し、制作者の主観的体験を明らかにし、治癒的要因との関連を論じることで、箱庭療法の治癒的要因に示唆を得ることを目的とする。

第1章では、本論文の主題となっている箱庭療法の治癒的要因を論じてきた先行研究の知見を概観し、その上で現在までに行われた調査研究を概観して、これまでの箱庭療法の研究の課題を明らかにした。すると、箱庭療法に関する知見の中でこれまで“箱庭をシリーズで見る”というように連続性が重視されているにも関わらず、連続性そのものを扱った研究は少なく、連続性をもった箱庭のプロセスに関する研究はいまだ十分になされていない現状があることが示唆された。また、制作者の主観的経験に対する研究は近年増えてきているが、“1つのアイテムを置く”のようなミクロな視点で検討されたものが多い。その一方で、箱庭制作の本質をその箱庭の持つ自我違和性などの“力動性”とする文献も多い。箱庭制作の中で生起する力動こそが治癒的要因に寄与する大きな要因とするならば、1回の箱庭制作だけに限らず“連続する箱庭制作の主観的体験”のプロセスを明らかにすることは示唆が得られると考えられる。まずは、1回の箱庭の関係性の中での力動を明らかにした上で、それを複数回制作された時の変化を検討することが必要であると考えた。

第2章では、第1章で提起した課題への問題意識をもとにして、青年期の大学生・大学院生男女各30人に1回の箱庭制作における制作者と箱庭イメージの関係性を質問紙で測定し、インタビューで箱庭制作体験について尋ねる調査を行った。質問紙の因子分析の結果、作成された質問紙「自我と箱庭イメージの関係性尺度」から「親和性」と「異質性」

の2因子が抽出された。「異質性」は箱庭が「制作者の中にはどこかありながらも普段の自分とは異質なものの、自分の意図を超えた存在として捉えられる関係性」であること、「親和性」が「しっくり感や満足感などの、前意識的なものも含みながら、意識で捉えられる親和感を持ったものとして箱庭が捉えられる関係性」であった。イメージと関係が薄いアイテムを置いてイメージが展開する<アイテム主導の展開>が異質性高群に多く、アイテムを主とした展開がある時に特に箱庭が自我とは異質だと捉えられやすいことがわかった。

「親和性」については、制作者が箱庭の中にいると体験されたり、日常に関する語りがインタビューで見られたりと箱庭との距離の近さが示された。この研究の特色として、「異質性」と「親和性」を独立に扱い、両方が共存する、また、どちらも存在しないという関係性を仮定したところにある。異質性低親和性低群では、アイテムからイメージを得ることが少なく、イメージが得られないと自分との結びつけが難しく、自分とは次元の違う存在になること、異質性高親和性高群は異質性高親和性低群よりもSD法の「のびのびとした」の評定値が有意に低く、のびのびとしたイメージの流れを止めて、親和的なものとしてイメージを受け入れている可能性が示唆された。

第3章では、第2章での検討を踏まえながら箱庭制作者が持ちうる関係性とその中ででの力動について検討した。箱庭制作時には、Kalfららの重視したような見守り手と制作者の関係性が生じ、それが作品の基本となるが、その関係性の中で制作者と見守り手の意識的なコミュニケーションだけでなく、無意識的なコミュニケーションが生じることが重要だと言われている。また、制作者と箱庭の対自的コミュニケーションも生じてくると言われているが、そのあり方としては意識的なものから全く意識上にのぼらない、コミュニケーションとして認識されないものまで多様なあり方が見られる。また、制作者のイメージ体験を含めると、箱庭の体験のされ方は制作者にとって距離感・存在感ともに様々であり、多様な体験のされ方が推測された。その上で、第2章で質問紙を用いて測定した関係性がどのような力動であるかを改めて検討し、次章以降の検討ではイメージの要素を併せて検討しながら連続性のある箱庭制作を論じていくこととした。

第4章、第5章、第6章では、これまでの議論を踏まえた上で、連続した箱庭制作になった時に、制作者の主観的にどのように体験されるかといった“連続性”と“プロセス”のキーワードも踏まえながら論じるために、青年期の大学生・大学院生30名に対し、3回の箱庭制作を行ってもらい、その後、質問紙への解答と制作体験に関するインタビューを行う調査研究を実施した。第4章では、まず、第2章で作成した「制作者の自我と箱庭イメージの関係性尺度」の尺度得点の変化の分析と語りの分析から3回の箱庭制作の主観的体験の全体像を把握しようとして試みた。その結果、1・2回目で親和性得点が高く異質性得点が高いが3回目は両得点が平均程度で、2回目から3回目にかけて73.3%が箱庭との距離が「離れた」と述べた「離れ変化群」、1・2回目で異質性得点が高く親和性得点が高いが、3回目に異質性得点が低く親和性得点が高くなる「自分変化群」、1・2・3回目を通じて異質性得点が高く親和性得点が高い「異質維持群」の3群が抽出された。語りの分析から自分変化群は2回目の箱庭の存在感が大きくなったこと、異質維持群では評定値には変化が

ないが3回目の箱庭制作で満足感が減ったことがわかった。第5章では、第4章の分析に加えて多角的に検討するために、SD法の印象評定と事例検討から、個々の事例に着目しながら第4章で抽出された各群の主観的な体験について検討した。離れ変化群では1・2回目ではびったりしたイメージを表現するが、3回目でイメージが動き出し予想外な展開になる箱庭にコミットできず、離れたところから遠い視点で見る事例、自分変化群では2回目で暗い・不愉快なイメージの箱庭に圧倒され、3回目では守りを固めた親和的な箱庭を作った事例、異質維持群では1回目で箱庭の存在感の大きさに相対し、イメージの次元で取り組もうとした結果満足感が下がる事例が抽出された。異質性が立ちあらわれた後、かつ最終回の制作である時に、親和的なイメージの中で「守る」ことや、結びつきを拒否するような「離れ」ることを必要とすることが明らかになった。また、異質なイメージに対してイメージの次元で取り組んでいこうとする過程が生じることも示された。

第6章では、さらに視点を変えて、調査事例全体を1回目、2回目、3回目それぞれの箱庭制作中のイメージ体験と、制作者の主観的な語りの中での1回目と2回目の体験の変化、2回目と3回目の体験の変化と質問紙の関係を分析した。分析の結果、1回目では箱庭に抱いたイメージがアイテムに影響されるかどうか箱庭全体のイメージに大きく影響を及ぼしていた。1回目と2回目では似たようなイメージ体験でも、2回目のの方がそのイメージ体験が全体の印象に及ぼす影響が大きくなっていた。また、2回目では1回目の箱庭と同じものを作りたくないという気持ちや気が楽になったという制作者の主観的な変化が制作に影響を与えていた。3回目では、半数以上の制作者がイメージを決めてから制作し始めるなど、イメージの体験の仕方に2回目までとは違いが見られた。また、箱庭制作から気づきを得られた制作者は自我異質的でないイメージを箱庭に抱いており、自我異質的でない箱庭を作る時、制作者には意識で捉えやすい箱庭からのフィードバックが起きることが示された。そのため、自我と親和的な箱庭を作ること、親和的でない箱庭を作ること、異質的な箱庭を作ること、異質的でない箱庭を作ること、それぞれに意義があり、異なるコミュニケーションがなされていることがわかった。

第7章では、視点を変えて、心理療法過程の中での異質な自分の表われ、特に分析心理学におけるイメージ体験による異質な自分との出会いについてその意義を論じた。これは、これまで論じてきた箱庭を制作する中で、自我と異質的な箱庭を制作することがたびたび制作者には見られた。そのようなイメージ体験の中で異質的なイメージに出会う体験が、心理療法の中でどのような意義をもち、どのように治癒につながると考えられているかに関する論を心理療法全体への視座を踏まえながら深めていくものである。先行研究の概観の結果、異質なものと出会ったときに、最初に働く力動は“排除”であるが、分析心理学ではその体験の中で出会う異質な自分を淘汰するのではなく、認めて接近し、その上で次の展開へと“弁証法的”な動きがなされることが重要であることが示唆された。

第8章では、第4章から第6章までで明らかになった知見と第7章で論じた知見を合わせて論じ、ここまで検討してきた連続する箱庭制作で見られる連続性とプロセスが心理療法としてどのような意義があるかに関する検討を行った。精神病理学的な症状を持つクラ

イベントは時間の連続性に著しい偏りが生じたり、連続性が断絶されたりする。その中で連続する箱庭制作を体験し、連続性を体験することはそれぞれのものが治癒的な働きがあると考えられた。そして、本章までに得られた箱庭制作におけるプロセスを再度検討し、1つ1つのプロセスが箱庭の治癒的要因と繋がりうることを示した。その上で、さらに連続性を検討するために、4回の箱庭制作を行った事例を検討し、今回得られた3回の箱庭制作のプロセスの中で見られた連続性が何回制作されるかわからない箱庭療法においてどのように適用されうるかを検討した。3回の箱庭制作で見られた、最後の制作でイメージ体験を深めずに親和的な箱庭イメージを作る「おさめる」体験は4回の箱庭制作においては4回目で生じていた。このことから、意識的・無意識的にせよ最後の箱庭制作でこの動きは生じてくるものだと思われる。その上で、初回の箱庭制作と最終回の箱庭制作の間に回数があるとイメージに対するコミットが段階的に進んだり、何度も体験されたりと、それが第7章で述べたような治癒的な動きが生じやすくなる可能性があることが示された。

序章から第8章まで、箱庭制作における主観的な体験の力動とプロセスを、調査研究と文献研究双方を踏まえながら明らかにし、その体験と箱庭療法の治癒的要因について検討してきた。終章では、本論文全体を踏まえ、箱庭療法における制作者の主観的体験とそれがどのように治癒的要因に繋がっていくかという最初に立てた問いについて本論文における結論を述べる。それに加えて、本論文の課題と今後の展望についても述べることで本論文の結びとした。箱庭を制作すると、強弱は様々あれども制作者はイメージを体験することとなる。そのイメージは制作者にとって受け入れやすい親和的なイメージである時もあるれば、制作者にとって受け入れがたい脅威的なイメージであったり、嫌な感じがするイメージであったりといった異質なイメージである時もあるれば、その両者が混在している時もある。異質なイメージは箱庭アイテム等によって意識的なコントロールから箱庭イメージが外れ、無意識的な力動が強くなったものと考えられるが、その異質なイメージがあらわれることは意識的なコントロールが過剰になる神経症等の病理を考えれば治癒的な動きと言える。しかし、異質なイメージは時に制作者を脅かすような動きにもなりうる。それが治癒的に働くためには、適切な守りが働くことと、その上でその心的内容に自我が向き合い、その上で弁証法的な動きを生じる必要がある。そのためには異質なイメージと親和的なイメージ双方が立ちあrawれていくことが不可欠であると考えられる。つまり、異質なイメージと親和的なイメージを揺れ動くことは治癒に繋がる機序であると考えられる。また、箱庭制作過程では三次元空間で制作者が自ら体験をおさめたり、イメージとの距離を取ったり、逆に中に入りこんだりと言った動きが箱庭のプロセスの中では自然と起こるが、そのことも制作者の内的な世界をおさめたり、コミットしたり、自らを守ったりといった面において治癒的な動きと言えよう。そのような心の動きをはらむものとして連続性をもった箱庭制作は考えられ、本論文の全体のまとめとして結論付けられた。

本論文では、非臨床群に対する調査研究が論文の主となっていたため、臨床群の体験についての検討をさらに進めていく必要があると考えられる。また、今回は本論文の目的意識に従い、制作者の主観的体験に焦点を当てたが、象徴体験など表現に関する体験や見守

り手側からの理解や第三者的な視点からの検討もさらに踏まえながら多角的に研究を行っていくことが今後の課題と展望として挙げられた。